

■**正阿弥勝義** 彫金師。岡山藩の金工名家を継ぐも明治維新で失職すると、新たな時代に対応し“超絶技巧”で世界を驚かせた。

しょうあみかつよし
富嶽三十六景1831＝

津山二階町で、代々津山藩お抱えの金工を家職とする八代中川五右衛門勝継の三男に生まれる。
幼名は淳蔵、通称は淳蔵、勝義は工名。

大塩平八郎乱1837＝ 6歳：

勲進帳初演・1840＝ **9歳**：

天保改革弾圧1842＝11歳：コレラの流行で、祖母，母，長兄が相次いで死去したこともあって、生活が窮状を極めるなか、父の指導で家業の金工を習い、また読書に励む。

阿部正弘首座1845＝14歳：

孝明天皇・・・1846＝15歳：江戸出府の方便として津山藩先手鉄砲隊小山家の継嗣となり、

・・・1848＝17歳：江戸津山藩邸に赴き、刀装金工家に入門を乞うも断られ、

北斎没・・・1849＝**18歳**：任期を終えて帰藩すると養子関係を解消し、備前藩お抱えの金工の名家正阿弥家の娘トマと結婚、婿養子になって、九代目を継ぎ、岡山に住む。

国定忠治疎・1850＝19歳：備前藩彫鏤試験に合格して生活の保障も得られ、後藤一乗の門人で、自身も江戸幕府及び朝廷の御用職人を務めていた次兄中川一匠から指導を受けるうち、その師後藤一乗本人と、相互に作品を遣り取りして指導を受けるようになり、すでに、高度な技術を持っていたことが窺える。

ペリー来航・1853＝22歳：藩主池田慶政の命で、短剣装具雲龍図金具一式を作成、以後、毎年藩主の注文を受け好みの意匠で作成、

五ヶ国条約・1858＝**27歳**：

安政の大獄・1859＝28歳：養母が死去。

桜田門外変・1860＝29歳：給米増封となるなど、安定した暮らしをしてきたが、

薩長同盟・・・・1866＝35歳：実父中川勝継が死去。

大政奉還・・・・1867＝**36歳**：この年開かれたパリ万国博覧会に、幕府と薩摩藩が出品し、

明治維新・1868＝37歳：ドイツの化学者ワグネルが来日して、各種工芸技術の科学的指導を開始、世界との関係が生じ始め、

戊辰戦争終・1869＝38歳：藩主池田章政の注文により、「金無垢蝶紋唐文様規剣装具」制作したのを最後に、

廃藩置県・・・・1871＝40歳：廃藩置県で失職、この時までが、お抱え金工として伝統技法を身につけた“第Ⅰ期”になる。

明治6年政変・1873＝42歳：日本政府は、初めて本格的に参加したウィーン万国博覧会で褒賞制を知り、

三つの反乱・1876＝**45歳**：廃刀令により刀装具の仕事もなくなり、多くの彫金家たちが廃業するなか、自らの技術を生かして、花瓶や香炉などの室内装飾品や彫像などの美術工芸品、茶器などを制作し始める。

西南戦争・・・・1877＝46歳：第一回内国勲業博覧会を皮切りに、以後の博覧会、展覧会に褒賞制を採用、工芸家たちの刺激となる。

大久保暗殺・1878＝47歳：*京都府博覧会に赤銅花瓶を初出品し有功銅牌受賞、ようやく自分を取り戻して制作に励むべく、職人30余名で輸出産業を起こし、神戸の貿易商の紹介でイギリス商人と売買契約を結ぶが、粗製偽物が出たため中止し、職人を少数に絞って美術工芸に専念しようとすると、イギリスから大衛立の注文を受け、米1斗が1円という時代に1万円で契約、日本近代金工三羽鳥の加納夏雄、海野勝珉らと、3年がかりで作り上げる間、

・・・1880＝49歳：

明治14年政変1881＝50歳：第二回内国勲業博覧会へ鳥銅地花鳥彫刻花生一對を出品し、皇太后初買上になったことが励みになって、以後、精力的に博覧会や美術展に出品し、各地で高い評価を受けて行く。非常に真面目で几帳面、筆まめで、近所にある正覚寺の稲荷社に詣でる以外外出せず、正月と葵祭の2日休むだけで制作に打ち込んだという。平行して複数の作品を作ったり、同時に同じ作品を作ることも多く、一作品の制作に1年近く、大作には数年を要し、作品が完成すると、懇意の人や弟子たちを集めて酒を振舞うのが家風となっていた。

秩父事件・・・・1884＝53歳：妻トマ死去。岡山後楽園に天皇陛下行幸の節、「糸瓜形花瓶」一個が買上げになるが、技術の高さは完璧なものの、作品としての粋は見られず、受賞はあるものの、

内閣発足・・・・1885＝**54歳**：かつての藩主に代わるパトロンはできず、苦悩の時代であったことを示すように、作品も少なく、この頃までが、一般工芸品制作へ転換してきた“第Ⅱ期”と言える。

帝国憲法発布1889＝58歳：東京美術学校が開校し翌年彫金科設置。東京美術展覧会で「蚕卵紙片皿」が三等賞銅牌、「古鏡形香合」が二等賞銅牌、シカゴ万博で扁額「麗銀地南天雪に鶉図」が三等銅賞と受賞が続くなか、

日清戦争始・1894＝**63歳**：この間、色絵金工へ傾斜し、

日清戦争終・1895＝64歳：「菊花虫図菓子器」などで確立したのを確信、法体となり“鉾々舎”と号するまでが“第Ⅲ期”になろう。

白馬会・・・・1896＝65歳：東京美術展覧会に歌会題額松帯雲にちなんだ香合を出品し、一等賞褒状で宮内省買上。

八幡製鉄始・1897＝66歳：京都博物館が開館した年、京都新古美術品展出品作のうち「寒山拾得香合」「小菊花香合」が宮内省初買上。東京美術展覧会一等褒状。「寒山拾得香合」完成。以後、10年ほど間に、「瓢虫花瓶」「紅葉香合」を制作。

子規句歌革新1898＝67歳：岡山正阿弥家を長男義之に相続させ、*美術研究のため京都市寺町通りに転居、京の伝統文化によって、才能を更に昇華、研究制作した「銅刻達磨大士」は宮内省買上で代表作となる。東京美術展覧会で三等賞銅牌の「光琳文様香合」も宮内省買上。「古瓦秩香炉」二点、「雛巢釣花瓶」「鶏香炉」「菊花香合」「鱗鳳龜龍香炉」、京都美術品展覧会出品の「千鳥玉川図香合」二等買銀牌宮内省買上。東京美術展覧会で二等賞銀牌「糸瓜釣花瓶」は15年前の同じテーマのものに比すれば作品の域に達し、「戸葉達磨尊像」が宮内省買上になるなど、名声を高めた作品の多くは、以後、没するまでに制作されることになる一方、新たな顧客獲得のための慣れない営業で身をすり減らし、これまでの人生でした事も無い借金もかさんでいくなか、

ビ7/国産化・1900＝69歳：寺町から竹屋町へ転居。日本からの出品最大のパリ万国博覧会「蟪蛄置物」「丹頂居鶴香炉」「松竹梅香炉」、田中正造直訴1901＝70歳：「亀置物」「小菊重彫菓子器」、東京美術展覧会三等賞銅牌の「芦鷺図花瓶」が宮内省買上になるなど傑作が続いて、他の追隨を許さなくなった“第Ⅳ期”を経て、

教科書疑獄・1902＝71歳：「鉄拐仙人香合」「東山曙意花瓶」、鉄錆地の代表的作品「難波潟如意鉄菓子器」など、粋と侘びの完成期(第Ⅴ期)に入るが、長男清次郎義之が49歳で死去してしまい、

日比谷公園・1903＝**72歳**：「呼子鳥香炉」。第五回内国勲業博覧会に出品した「風雷神図花瓶」は3等賞で宮内省買上、箱書きに記された「図倣金岡筆意」は、当時岡山の実業家の手元にあった伝巨勢金岡筆「風神雷神図双幅」であろう。

日露戦争始・1904＝73歳：「麗銀雲龍香炉」。セントルイス万博出品「緋銅直鐘燵様彫花瓶」が一等賞金牌となり、フィラデルフィア博物館初買上、この頃から、パトロンの離反に対する苦悩をこぼすことが多くなり、

日露戦争終・1905＝74歳：「鉄地雲龍文花瓶」「蜻蛉香合」「純金秋海棠虫図指輪」。「麗銀製葡萄虫花瓶」完成。東京美術展覧会出品「葡萄虫花瓶」一等賞金牌で宮内省買上、京都美術品展覧会一等賞金牌、

満鉄発足・・・・1906＝75歳：東京美術展覧会「鍛鉄鋌起葡萄虫花瓶」一等賞金牌で宮内省買上、東京金工品会展覧会二等賞銀牌、京都美術品展覧会特別賞牌、東京凱旋五二共進会特別賞牌、遺されたこの年の手紙には、'時勢で、これからは図案家に協議の方がよく売れる。個人の作は勢力が薄い。技術は老人が上でも、東京の方が勢力がある'と語り、焦りや諦念、無力感が読み取れる。

韓国反日暴動1907＝76歳：「諫鼓鶏香炉」「素銅靈芝文鎮」。京都美術品展覧会特別一等賞、連合共進会特別賞。日本美術協会一等賞牌宮内省買上になるなど、特別賞、一等賞が続き、国の内外で著名となり、

アヲヲ創刊・1908＝77歳：*4年前前に構想を発表して着手した「純銀地鉄象眼葡萄虫花瓶」がようやく完成して、東京勲業博覧会特別賞、日本美術協会一等賞金牌宮内省買上というピークに達した矢先、金工を志していた孫義継が死去して、後継者を失い、まもなく、京都岡山人会に出席し、脳卒中で没し、金工の直系の技術は絶えた。帝室技芸員を頂点とする近代美術史研究の中では、地方の名工という位置付けで、地元岡山ではともかく一般に高く評価されていたとは言いがたいが、海外の収集家には高く評価され、多くの作品が国外に流出した。現在、確認されている作品は150件ほど、小品や刀装具を含めればその2倍以上あると見られる。

臼井洋輔「正阿弥勝義の世界」、Wikipedia「正阿弥勝義」、